江戸時代の賀茂別雷神社の植生景観と日本林制史資料にみられる資源利用

The vegetative landscape of Kamo-wake-ikazuchi Shrine and resource utilization found in historical documents of forest management from the 17th to 18th century

今西 亜友美* 杉田 そらん** 今西 純一* 森本 幸裕*

Ayumi IMANISHI Soran SUGITA Junichi IMANISHI Yukihiro MORIMOTO

Abstract: In Japan, the public tends to believe that shrine forests are remnant of primary vegetation of a region. However, recent studies show that several shrine forests in Kansai region were once dominated by pine trees. We studied relationship between vegetative landscape of the Kamo-wake-ikazuchi Shrine and resource utilization from the 17th to 18th century. Comparison of old drawings and the historical documents on forest management of the shrine indicated that there were pine, Japanese cedar, Japanese cypress and broad-leaved trees at the precinct and that the neighboring shrine mountains were dominated by pine trees. The historical documents also revealed that 1) trees including Japanese cedar were planted at the precinct for aesthetic purposes, 2) illegal collection of forest resources at the shrine mountains was prohibited, 3) the right of forest resource utilization including loggings were bid, 4) underbrush were cut and collected by shrine families. These results indicated that the shrine mountains were protected not as sanctuaries but as properties of the shrine. Comparison with another shrine indicated that periodical loggings and underbrush cleanings were once common management at shrine forests and pine trees were naturally regenerated by them.

Keywords: shrine forests, pine, old drawing, historical documents of forest management, Kamigamo Shrine

キーワード: 神社林, マツ, 絵図, 日本林制史資料, 上賀茂神社

1. はじめに

日本の都市において神社や寺院に付随する森林(社寺林)は、生物の生息地や人々のレクリエーションの場として重要な役割を担っている。社寺林は、しばしば人手を加えられずに保護された原生林として認識される^{1) 3)}。一方で、滋賀県や北摂地域の神社林⁴⁾、神戸市太山寺⁵⁾、京都市賀茂御祖神社^{6) 7)}を対象として、絵図や地形図、花粉分析などにより、過去の植生景観を検討した先行研究では、少なくとも江戸期から明治期は、現在とは異なり、マツが優占する景観であったことが示されている。

明治維新後、社寺に対して様々な改革が行われ、神仏分離令や社家による神職世襲制の廃止、上知令などにより、社寺の管理体制は大きく変化した⁸⁾。境内についても、明治6(1873)年の太政官布告291号「社寺境内ヲ官有地トナシ伐木禁止ノ事」をはじめ、明治7(1874)年、15年(1882)年、18(1885)年に社寺境内の樹木の伐採制限が通達されている^{1) 9)}。このように、明治期は社寺境内の管理体制の一つの転換期であったと考えられる。

吉良(1976)¹⁰⁾は滋賀県の社寺林の樹木の大きさや下生えの種類の貧弱さから、社寺林の意識的な保護が始まったのは明治以降ではないかと推測している。また、鳴海・小林(2006)⁴⁾は、マツ林が維持されてきた理由について、かつて社寺林でも林野資源の恒常的な利用があったのではないかと推測し、今西ら(2008)⁷⁾は京都市の賀茂御祖神社を対象として、社家日記を用いて江戸期の林野資源の利用について検討し、江戸期には枯れマツの伐採や定期的な下刈り等の管理が行われていたことを明らかにしている。

社寺林は、その役割によって大きく3つに区分することができる^{1) 11)}。1つ目は森林そのものが神体である場合で、代表的なものに奈良県の大神神社がある。このような神体林の多くは聖なる場所として立ち入りや伐採が制限されていた。2つ目は社寺の風致と尊厳を増すことを目的として社寺周囲に存在する森林で、日本の社寺林の大部分はこれに該当すると考えられる。3つ目は用材備林等として管理・運営がされてきた森林で、代表的なものに

伊勢神宮の造営用材備林がある。これらの森林の役割による区分に、立地や面積を加えることにより、より詳細な類型分けをすることができる¹¹⁾。森林の立地や面積が異なれば、利用可能な林野資源も異なることが予想されるため、このような類型分けは、社寺林の植生景観と資源利用の関係を一般化して捉えるために有用である。また、類型ごとにそれらの関係が明らかとなれば、史料が十分に集まらない場合にも、景観の保全や復元の目標像の検討を進めることが可能となる。

これまで社寺林における林野資源の利用については、前述した通り、平地の風致林を持つ賀茂御祖神社を対象とした報告⁷⁾があるが、その他の類型についての報告はみられない。平地の風致林は日本の社寺林の中でも典型的なタイプと考えられるが、山麓に位置する社寺で山地に風致林を持つものも多数存在する。本研究では、山地に風致林を有する神社において、江戸時代の植生景観と資源利用の関係を明らかにすることを目的とした。また、平地の風致林⁷⁾と比較することにより、江戸時代の社寺風致林において共通して行われていた資源利用とそれにより形成された植生景観、およびそれぞれに特有の資源利用と植生景観を整理した。

2. 方法

(1) 調査対象の検討

調査対象は、江戸時代初期から中期まで、すなわち1600年代と1700年代の賀茂別雷神社の社領とした。前述の通り、明治時代以降に社寺林の管理体制が大きく変化したと考えられるため、本研究では明治時代の前の時代である江戸時代を取り上げた。また、1600年代と1700年代には賀茂別雷神社の植生景観や資源利用を検討可能な史料が比較的多く残されていることも、この時期を選定した理由の一つである。

賀茂別雷神社は、通称上賀茂神社と呼ばれ、京都市の北部の山麓に位置する。現在の社領面積は、本殿周辺の平地や山林、飛地境内、所有地であるゴルフ場を合わせて782.8 km²であり¹²⁾、一

*京都大学大学院地球環境学堂

**京都大学大学院農学研究科

図一 江戸時代の賀茂別雷神社の社領域（下地の図は1909年測図の正式二万分之一地形図）

部は1993年に国の史跡に指定され、保存の対象となっている。また、本殿周辺の平地や山林、祭神の鎮座する磐坐のある神山（賀茂別雷神社の北にある山）の一部は、古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法の歴史的風土特別保存地区に指定されており、歴史的景観の保全復元が重要な課題となっている。このように賀茂別雷神社は、境内の風致の維持や管理が重要な神社であり、過去の植生景観や林野資源の利用を明らかにすることは基礎資料として必要であると考え、調査対象として選定した。また、今西ら（2008）⁷⁾によって江戸時代中期の植生景観と資源利用が報告されている賀茂御祖神社と同様に賀茂氏の氏神を祀っており、地理的にも近い位置にあることから、平地林と山地林の管理形態の相違が比較可能であると考えた。

（2）賀茂別雷神社社領の江戸時代初期から中期までの状況

賀茂別雷神社の江戸時代の社領範囲は、西は賀茂川、東は深泥池周辺および鞍馬街道、北は市原、南は京都府植物園付近まで¹³⁾（図一）であり、1600年代後半に新開田畑が社領に追加されたりはした¹⁴⁾が、明治維新まで大きな変化はなかった。本研究では、賀茂別雷神社の風致上、重要な地域として、本殿周辺の民家や田畑を除いた平地（以下、境内と呼ぶ、図二）とそれに接続する山林を調査の主な対象とした。

（3）検討に用いた史料

1）絵図史料

江戸時代初期から中期の賀茂別雷神社の植生景観を検討するため、1600年代に描かれた5つの絵図と1700年代後半に描かれた2つの絵図を用いた（表一）。

1600年代に描かれた5つの絵図は、いずれも屏風画であり、正確な作成年や作成者は不明である（表一）。「洛中洛外図」2点と「洛外図」は、賀茂別雷神社のみではなく、京都全体を描いたものである。「祇園祭礼・賀茂競馬図」と「賀茂競馬図」は祭礼図屏風画であり、賀茂別雷神社を中心として、植生も細かく描かれて

図二 江戸時代（17世紀半ば）の賀茂別雷神社の境内図（下地の図は洛外図の一部）

表一 植生景観の検討のために用いた史料

史料名	作成年	作成者	備考
洛中洛外図（文化庁所蔵）	1607年以降	狩野光信？	左隻1層に描かれている
洛中洛外図（歴博C本）	1626年以降	不明	左隻1層に描かれている
洛外図	17世紀半ば	不明	右隻6層に描かれている
祇園祭礼・賀茂競馬図	17世紀	不明	左隻1、2層に描かれている
賀茂競馬図	17世紀	不明	右隻に描かれている
上加茂社	1780年刊行	竹原春朝斎	都名所図会の一部
賀茂の競べ馬	1780年刊行	竹原春朝斎	都名所図会の一部

いる。なお、賀茂競馬とは、5月5日に賀茂別雷神社境内に設けられた馬場において、2騎1組で10組が速さを競い、天下泰平や五穀豊穰を祈願する神事のことである。

1700年代後半に描かれた2つの絵図は、秋里籬島著、竹原春朝斎画の「都名所図会」に収録されたものである。これは京都とその近郊の名所の案内図であり、その挿絵についてはその場所の風景をありのままに模写することを基本姿勢としている¹⁵⁾。

これらの絵図は、植生の記録を目的として描かれたものではないが、同時期に制作された絵図を比較することにより、描かれた植生景観の信頼性を検討することは可能である¹⁶⁾と考えて取り上げた。また、これらの絵図のうち、1700年代後半に描かれた2つの絵図は同じ絵師によるものであるが、1600年代に描かれた絵図は作風がそれぞれ異なることから、異なる絵師によって独自に描かれたと考えられ、比較が可能であると考えられる。

2）文献史料

江戸時代の賀茂別雷神社の資源利用については、日本林制史資料¹⁷⁾を用いて検討した。これは、1879～1880年頃に内務省山林局が、山林管理の変遷を明らかにして林野制度設置の参考にするため、各府県に命令して記録文書や図書遺物を収集し、特に重要であるものを選択して編纂したものである。

（4）検討方法

1）植生景観の検討

絵図に描かれた植生景観を比較検討するためには、比較しようとする絵図の制作時期が近いことが望ましい¹⁶⁾。また、絵図と同時期に書かれた文献にみられる植生に関する記述と、絵図の描写とを比較することで、より信頼性の高い植生景観を検討することができる¹⁶⁾。そこで、1600年代に描かれた5つの絵図と1700年代後半に描かれた2つの絵図を、それぞれの時期において検討した。なお、絵図に描かれた樹木は、種を特定することが難しいため、小椋¹⁶⁾に従いマツタイプ、スギ・ヒノキタイプ、広葉樹タイプの3つのタイプに分けて検討した。さらに、日本林制史資料¹⁷⁾より、植物名とそれが生育していた場所の記述を抽出し、各年代でまとめて、絵図の記述と比較検討した。

2）資源利用の検討

465

図-7 賀茂競馬図（境内の一部および社有林の一部）

図-8 上加茂社（境内の一部および社有林の一部）

図-9 賀茂の競べ馬（境内の一部）

表-2 1600年代後半（1653-1695年）の日本林制史資料にみられる植物名と場所

樹種	場所*
マツ	馬場先
	澤田社
	サヘ山
	賀茂山
	高山
スギ	神山
	松茸小屋
	大谷いさり谷
	地獄谷
	馬場先
ヒノキ	大田社
	番所の西
	サヘ山
カシ	御前の後の山
	馬場先
ヤナギ	サヘ山
ハンノキ	澤田社
ミズキ	湯屋後
雑木	馬場先
タケ	川原京方の新堤

* 斜体は山地部の地名を示す

表-3 1700年代後半（1771-1792年）の日本林制史資料にみられる植物名と場所

樹種	場所*
マツ	一鳥居前
	聖神寺より上
	聖神寺北の林
	馬場先西北
	神宮寺山裏手
スギ	神山
	聖神寺の上
	聖神寺南の林
	神宮寺池端
	馬場先西北
ヒノキ	酒殿南
	大田社森西東
	澤田社東
トドマツ	一ノ鳥居の内
	札場の後
ケヤキ	富浦園
	聖神寺北の林

* 斜体は山地部の地名を示す

表-4 日本林制史資料にみられる山林の資源採取に関わる禁止事項

年	禁止事項
1615	当社山林の竹木の採取禁止、違反者には厳科
1622	山林の木の根の掘取り禁止
1665	競馬厩立の柱を当山から採取することを禁止 スギ柴、マツ葉は1荷ずつ月奉行に届けてから刈ること ヒノキ柴は採取禁止 草は2荷ずつ五郎太郎に届けてから取ることを禁止
1676	社家がみだりに枯れ木等を伐採することを禁止
1684	盗んだ木と考えられるものを買い取ることを禁止 当山の土を取ることを一切禁止

示した記述以外に、1688年8月には神山において、マツ葉の採取および枝打ちが社家町の人々によって行われた記述があった。マツの他には、スギ、カシ、ミズキ、タケの記述がみられたが、その他の木は樹種の記述がなかった（表-5）。マツ以外の樹種も、タケを除いて、主に風折れ木や枯木が伐採されていた（表-5）。1700年代後半には、マツ、スギ、シイと樹種不明の木の記述があり、いずれの樹種においても主に風折れ木や枯木が伐採されていた（表-6）。表-6に示した記述以外に、1717年11月と1783年6月には神山の入札の記述がみられた。1717年11月には神山を27箇所に分け、入札を行っていたが、何を採取する権利を入札したかについては記述がなかった。1783年6月には神山の立木と下生え一式が入札されていた。

1600年代後半および1700年代後半のいずれの時期においても、樹木は修復等に利用されるだけでなく、入札され売却されていた（表-5、6）。落札者は極印のついた御払木を、決められた期間内に伐採、搬出する権利を得た記述がみられた。

1773年10月には、1777年に行われた安永の式年遷宮のための造営用木についての記述があり、山林ではなく、平地部のマツ、

こしは3斗5升、柴は8升、木葉は5升、手折は5升、松葉は8升と決められていた。

2) 樹木の伐採および利用

1600年代後半には、マツが伐採、利用された記述が最も多く、14件みられた（表-5）。伐採されたマツは古木や風折れ木、枯木が多かったが、立木も伐採されていた（表-5）。また、表-5に

表一5 1600年代後半(1665-1691年)の日本林制史資料にみられる樹木の伐採に関わる記述

樹種等	量	場所*	用途
マツ	—	馬場崎の勝示杭の内	入札
マツ	130本	一口坂新田の辺り	入札
マツ立木	7本	一口坂	入札
小松	—	一口坂	入札
古マツ木	—	高山	入札
マツ(風折れ)	1本	澤田	入札
マツ(枯木)	98本	山	入札
枯れマツ	—	当山	—
マツ枝(枯木)	279束	山	入札
マツ葉(枯木)	537把	山	入札
マツ葉	145束	一口坂新田の辺り	入札
マツ葉	40束	松茸小屋	入札
マツ葉	70束	太谷いさり谷	入札
マツ葉	40束	地獄谷の辺り	入札
スギ	2本	御前の後ろの山	評議所南の屋根板修復用
スギ(風折れ)	3本	番所の西	入札
スギ(風折れ)	3本	大田	入札
カシ(風折れ)	1本	澤田	入札
カシ(風折れ)	1分	湯屋後	入札
ミズキ(風折れ)	1分	湯屋後	入札
スギ、ヒノキを除いた雑木	—	馬場崎の勝示杭の内	入札
枯木	—	—	猪追の松明木用
風折れ木	587本	当山	入札
枝色々(風折れ)	16本	神宮寺	入札
タケ	300本	—	入札
タケ枝葉	—	当山	入札

* 斜体は山地部の地名を示す

スギ、ヒノキ、ケヤキ、カシが選定され、このうち、マツが75本と最も多く選定されていた(表一7)。同年11月には、聖神寺周辺の林、大田社の森、澤田社東、酒殿南、贅殿東は重要な場所であるため、上記の場所で選定された木を造営用木から外すように奉行所に免除願いを提出した記述がみられた。

3) 樹木以外の林野資源の利用

樹木以外の林野資源として、マツタケやキノコが入札された記述が、1600年代後半に4件(1665年7月、1675年8月、1685年8月、1691年8月)、1700年代後半に1件(1788年7月)みられた。マツタケやキノコの発生する山が入札の対象とされ、落札者は8月初旬から10月中旬まで、落札した山でマツタケやキノコを採取する権利を得ていた。また、落札者に対して、木柴の刈り取りや落ち葉の採取を禁止した記述がみられた。

4) 下刈り

1600年代後半に、山の下刈りについての記述が12件みられた(表一8)。下刈りは、主に2月下旬または3月下旬、10月中旬に行われていたが、5月、7月、8月に行われた記述もあった。

1666年2月に下刈りの手順についての詳しい記述があり、16日に下刈りをする山を10箇所に分け、10組に分かれた社家町の人々がくじ引きによって担当箇所を決めていた。同日、山に入るための道を作る担当箇所を、同じく10組に割り当て、17日に道を作っていた。また、17日には下刈り当日に山の入り口6箇所、社家町以外の人々が山に入らないようにするための見張りの担当箇所をくじ引きによって10組に割り当てていた。さらに、18、19日に下刈りの細かき担当範囲を決定し、20、21日に下刈りを行っていた。下刈り初日には、5組が山の入り口で見張りをし、残り5組が下刈りを行っており、次の日に役割を交替していた。

また、下刈りの際には鎌以外の刃物(ナタ、マサカリ、ノコギリ)の持ち込み、松葉の採取、立木、枯木の伐採、穂拾い、他郷の者への譲渡、たき火といったことが禁止された記述がみられた。

5) 植栽

1600年後半、1700年代後半ともに、スギが植栽された記述があった(表一9、10)。1600年代後半には、スギの他にヤナギ、ハンノキ、タケ、芝、樹種不明の木の記述があり(表一9)、1700年代後半には樹種不明の木が植栽された記述があった(表一10)。植栽場所はいずれの時期においても馬場の周辺の記述がみられた

表一6 1700年代後半(1756-1792年)の日本林制史資料にみられる樹木の伐採に関わる記述

樹種等	量	場所*	用途
マツ	1本	神宮寺山裏手	奈良社後橋の添え木用
マツ	—	当山	薪用
マツの風折、倒木、枯木	129本	八幡が尾、塔尾平尾、オ山、出崎の辺り	入札
マツ葉	—	当山	—
スギ枯木	—	聖神寺の上	修理用
スギ枯木	—	神宮寺池端	入札
スギ枯木	1本	太田社池の辺り	—
シイ枯木	1本	—	薪用
風折れ木、枯木	108本	オ山より一口坂かしが谷内のから竹並びに姥が懐まで	入札
風折れ木、枯木	22本	八幡が尾、塔尾平尾、オ山、出崎の辺り	小屋、木挽小屋輪台、輪木用
風折れ木、枯木	12本	オ山より一口坂かしが谷内のから竹並びに姥が懐まで	西の小屋用
風折れ木、枯木	18本	オ山より一口坂かしが谷内のから竹並びに姥が懐まで	薪用
枯木	28本	八幡が尾、塔尾平尾、オ山、出崎の辺り	薪用

* 斜体は山地部の地名を示す

表一7 安永の式年遷宮のために1773年10月に造営用木として選定された記述のあった樹種

樹種	量	場所
マツ	40本	海道西一式
	32本	馬場崎西北
	2本	一鳥居前
	1本	聖神寺より上
スギ	9本	馬場崎西北
ヒノキ	9本	聖神寺より上
	1本	大宮森*
ケヤキ	1本	札場の後
	1本	葛蒲園
カシ	3本	大宮森*

* 大宮森とは、賀茂別雷神社の境外摂社である久我神社(京都市北区紫竹下竹殿町)周辺の森のこと

表一9 1600年代後半(1665-1685年)の日本林制史資料にみられる植栽に関わる記述

樹種等	場所
スギ	大田社西
ヤナギ	馬場崎東
ハンノキ	馬場崎東
タケ	川原京方の新堤
芝	とがたの辺りの川
木	下河原新開畠
	馬場の辺り
	とがたの辺りの川

表一8 日本林制史資料にみられる下刈りに関わる記述

年	月日	場所
1653	5月	賀茂山
1664	8月	—
1665	2/21, 22, 23	サヘ山
		ヒケソノ岩より
1665	7/26, 28	北裏、杉原、丸山、御生所山、新林
1666	2/20, 21	—
1668	2月	—
1672	3/20, 21	—
1675	3/19, 20, 21	—
1676	10/18, 19, 20	ヒケソノ北から内ヶ唐竹の北谷まで
1691	10/15, 16	寛ノ谷からゴツホリまで
1695	2月	八幡谷刈小口から寛ノ谷
1695	10/16, 17	入江の垣より御生所山神館丸山峠の下、姥ヶ懐より西へ内ヶ唐竹の谷底

表一10 1700年代後半(1756-1788年)の日本林制史資料にみられる植栽に関わる記述

樹種等	量	場所
スギ	123本	—
	40本	森
	—	十八龍辺り
木	—	馬場辺り
	1800本	—

(表一9、10)。また、表一9、10で示した記述の他に、1756年8月には毎年植樹をしているがその甲斐もなく大方枯れているため、木数は少なくとも良く育つようにせよという記述があり、1792年2月には、木植の時節のため植樹すべきという記述があった。

4. 考察

(1) 絵図および日本林制史資料から読み取れる江戸時代初期から中期の植生景観

1600年代と1700年代後半の絵図とともに、境内には、マツタイプ(図一3、5、6、7、8、9)、スギ・ヒノキタイプ(図一3、4、5、6、7、8、9)、広葉樹タイプ(図一6、7、8、9)の樹木が描かれていた。日本林制史資料には、1600年代後半と1700年代後半ともにマツ、スギ、ヒノキの記述があり(表一2、3)、これら3種の針葉樹はどちらの時期においても境内に生育していたと考えられる。広葉樹については、1600年代後半にはカシ、ヤナギ、ハンノキ、ミズキ(表一2)、1700年代後半にはケヤキ(表一3)の記述があり、少なくとも各時期にそれらの広葉樹が境内に生育し

ていたと考えられた。なお、マツタイプ、スギ・ヒノキタイプ、広葉樹タイプの樹木の位置や構成比は絵図によって異なり、本研究で取り上げた絵図でそれらのことについて議論することはできない。少なくとも日本林制史資料に記述のあった場所には記録された樹種が生育していたと考えられた。

1600年代と1700年代後半ともに、絵図に描かれた山地部にはマツタイプの樹木が描かれており(図-4, 5, 6, 7, 8), 日本林制史資料にも1600年代後半(表-2), 1704年, 1700年代後半(表-3)に主にマツの記述があったことから、社領内の山林はマツが優占していたと考えられる。1600年代後半には、スギ、ヒノキ、タケの記述があり、マツだけではなく、それらの樹種も生育していたことが推測された。日本林制史資料には下刈りが行われていた記述があり(表-8), 山林には下生えも多かったと考えられた。

(2) 江戸時代初期から中期の山林管理

江戸時代初期から中期の賀茂別雷神社では、社領内の林野資源は、私用での採取が禁止されており(表-4), 窃盗を防ぐため山廻衆による見回りが行われ、違反者に対する罰則も制定されていた。1600年代後半には社家町の人々によって下刈りが行われており(表-8), 1600, 1700年代を通して樹木の伐採(表-5, 6)やマツタケ、キノコの採取の入札の記録があったことから、社領内の山林は神域として厳重に保護されていたのではなく、神社の財産として保護されていたと考えられた。1865年8月の日本林制史資料¹⁷⁾にも、山木は臨時の手当てであるため、私欲のため伐採することは厳罰に処すという記述がみられたことから、少なくとも江戸時代を通して、山林の資源は社家への報酬や神社の収入源として管理、保護されていたと考えられた。

(3) 江戸時代初期から中期の植生景観と資源利用との関わり

1756年8月と1792年2月の植栽に関する記述より、少なくとも1700年代後半には毎年2月に樹木の植栽が行われていたと考えられた。植栽された場所として、1600年代後半, 1700年代後半ともに馬場周辺の記述があり(表-9, 10), 1801年2月の日本林制史資料¹⁷⁾には、聖神寺裏川端、御生所、神宮寺池端、大田社近辺が植栽場所として選ばれた記述があったことから、植栽は山林ではなく、主に境内で行われていたことが推察された。安永の式年遷宮のための造営木選定の際に、境内の樹木が主に選定されていた(表-7)ことから、木材育成のために植栽していた可能性も考えられる。しかし、境内の一部の地域で選定された樹木を造営用木から外すように奉行所に免除願いを提出していたことから、境内の風致の維持が植栽の主な目的であったと考えられた。

社領内の山林にはマツが優占していたことが推定された。山林では、主に古木、枯れ木、風折れ木が伐採され(表-5, 6), マツの枝打ちやマツ葉の採取も行われていた。また、1600年代後半には定期的な下刈りも行われていた記述があった(表-8)。これらの管理により、マツタケが発生可能なアカマツ林が、自然に成立していたと考えられた。社領の一部である神宮寺山では、1950年頃でも木々の背が低く、赤茶けた地肌が散見できたことが報告されており¹⁸⁾、賀茂別雷神社権補宜の談話では第二次世界大戦前頃までは社家町の人々によって神宮寺山の下刈りが行われていたことから、戦後、徐々に資源利用が行われなくなり、遷移が進行したと考えられた。

(4) 賀茂御祖神社との比較

平地の風致林を持つ賀茂御祖神社⁷⁾においても、境内林の樹木は積極的に伐採されず、主に枯死木や風折木が伐採され、下刈りも行われていた。このことから、枯死木等の除伐や下刈りは、江戸時代の社寺風致林の管理として一般的に行われており、それによりマツを中心とする植生景観が維持されていたと考えられた。樹木の伐採などの林野資源の利用の際に入札を行うことは、賀茂

御祖神社⁷⁾や豊中市の春日神社⁴⁾においても行われており、江戸時代の社寺風致林では一般的であったと考えられた。

賀茂別雷神社では、境内にスギが植栽されていた記述がみられた(表-9, 10)。賀茂御祖神社においてもスギ苗の購入等の記録があったことが報告されており⁷⁾、神社では荘厳な雰囲気のため¹⁰⁾、境内にスギが植栽されることが多かったと推察された。

三角州に位置する賀茂御祖神社では、竹林が多く、タケが大量に伐採され利用されていた⁷⁾が、賀茂別雷神社ではタケの利用は少なかった(表-5)。一方で、山林を有する賀茂別雷神社では、賀茂御祖神社ではみられなかったマツタケの入札の記録があった。共通して利用されていた枯死木や下生えの他に、立地条件に応じて、採取可能な林野資源を上手く利用していたことが伺えた。

賀茂御祖神社では伐採や下刈りなどの実質的な森林管理は、特定の氏人に任されていたことが推測されている⁷⁾。賀茂別雷神社では、下刈りは社家町の人々が分担して行っており、日本林制史資料には、山奉行、木山奉行、木植奉行、下刈奉行といった森林管理に関する役職の記述があった。また、1664年に江戸幕府評定所が賀茂別雷神社へ示達した裁許状第十条では、神山の木は社家中(社司と氏人)の相談によって神社の御用の為に刈る以外は一切私用の為に伐つてはならない、三年に一度の下刈りは社司氏人ともに刈ることと定められている¹²⁾。賀茂別雷神社では、賀茂御祖神社⁷⁾に比べて森林面積がより大きかったため、特定の氏人のみが森林管理に携わっていたのではなく、社家中で役割を分担して管理にあたっていたと考えられた。

本研究で明らかになった江戸時代の植生景観は、賀茂別雷神社の景観の保全や復元の目標像を検討する上で重要な情報を提供しうるものと考えられる。賀茂別雷神社の山林は、本研究で示したような管理の履歴を持つことから、より良い景観の創出や生態系の保全に向けた必要な植生管理が積極的に検討されることが望まれる。

謝辞：調査に協力頂いた賀茂別雷神社に感謝の意を表する。なお、本研究の一部は科学研究費補助金(20241009)を用いて行われた。

引用文献

- 1) 吉田元(1983): 社寺林—その現状と保護について—: 密教学 19, 90-104
- 2) 安田喜憲(1992): 日本文化の風土: 朝倉書店, 100-102
- 3) 市川健夫(1998): 森と木のある生活: 白水社, 226-229
- 4) 鳴海邦匡・小林茂(2006): 近世以降の神社林の景観変化: 歴史地理学 48 (1), 1-17
- 5) 松下まり子(1997): 江戸時代以降の神戸市太山寺境内林の束歴: 植生史研究 5 (2), 77-83
- 6) 坂本圭児・吉田博宣(1986): 都市域におけるニレ科樹林(木)の残存とその形態: 造園雑誌 49 (5), 131-136
- 7) 今西亜友美・吉田早織・今西純一・森本幸裕(2008): 江戸時代中期の賀茂御祖神社の植生景観と社家日記にみられる資源利用: ランドスケープ研究 71 (5): 519-524
- 8) 「社寺林と法」研究会(1985): 社寺林と法 (3): 法律のひろば 38 (1), 74-80
- 9) 中島節子(1996): 明治初期から中期にかけての京都の森林管理と景観保全: 日本建築学会計画系論文集 481, 213-222
- 10) 吉良竜夫(1976): 自然保護の思想: 人文書院, 95-106
- 11) 「社寺林と法」研究会(1984): 社寺林と法 (1): 法律のひろば 37 (10), 60-64
- 12) 藤木文雄(2007): 神山考: 賀茂文化 4, 66-79
- 13) 賀茂別雷神社社務所編(1996): 賀茂別雷神社由緒略記: 賀茂別雷神社社務所, 27-31
- 14) 平凡社編(1997): 京都・山城寺院神社大事典: 平凡社, 157-165
- 15) 西野由紀(1998): 「名所図会」本の挿絵: 宗政五十緒編「日本近世文学研究の新領域」: 思文閣出版, 135-162
- 16) 小椋純一(1992): 絵図から読み解く人と景観の歴史: 雄山閣出版, 70-95
- 17) 農林省編(1971): 日本林制史資料 賀茂別雷神社社領: 臨川書店, 215pp
- 18) 西村勁一郎(2008): 京都・上賀茂と二つの鞍馬街道—その今昔: 西村勁一郎, 162pp